
『源氏物語』におけるフェミニズム思想の再解釈 Reinterpreting Feminist Thought in "The Tale of Genji"

إعادة تأويل الفكر النسوي في "سيرة الأمير جنجي"

د. صفاء محمود محمد نور^(*)

要旨

本研究は、日本古代文学における女性像に焦点を当て、特に平安時代（794-1185）を対象とする。この時代は「女性文学の黄金期」として知られており、紫式部による『源氏物語』を通じてその特徴を再解釈・再評価することを目的としている。『源氏物語』は約1008年、11世紀初頭に執筆され、日本古代文学の傑作の一つとされる。本作は、主人公である光源氏の恋愛冒険を中心に展開し、当時の貴族社会や宮廷生活を鮮やかに描写している。本研究では、作品におけるジェンダー関係の再解釈を試みるとともに、皇族や貴族の女性が仏門に入る現象に注目する。このような現象を通じて、日本におけるフェミニズム思想の起源が、現代や西洋文化に由来するものではなく、古代からその根を持つものであることを明らかにすることを目指す。

キーワード：フェミニズム、平安時代、源氏物語、紫式部

Abstract

This research aims to shed light on women in the literary heritage of the Japanese literature in ancient times, especially Heian era (794-1185), which is considered the golden age of women's Literature in Japan. Through re reading and reinterpreting the novel of Murasaki Shikibu, "The tale of Genji." Which have been writen in 1008 in the the eleventh century. This novel is considered one of the masterpieces of Japanese literature in ancient

^(*) مدرس بقسم اللغة اليابانية، كلية الآداب - جامعة القاهرة.

times .It reveals the nobles and imperial court's way of living at that time through focusing on the main character of the novel Prince Hikaru Genji's and his love affairs. This research attempts to reinterpret the gender relations in the novel, analyze it , and show the denotations of princesses and court ladies becoming buddhist nuns and that to prove the depth of feminist thought in Japan, and that it is not the fruit of the modern age and not an imported thought from the western culture, but it has deep roots in the japanese thought since ancient times.

Key words: Feminism, Heian Era, The tale of Geni, Murasaki Shikibu

المستخلص

يهدف هذا البحث الى إلقاء الضوء على المرأة في الموروث الأدبي الياباني في العصر القديم وخاصة عصر هيآن (٧٩٤-١١٨٥) و الذي يعد العصر الذهبي للأدب النسائي. وذلك من خلال إعادة قراءة و تأويل رواية موراساكي شيكيبو "سيرة الأمير جنجي". و لقد كتبت هذه الرواية عام ١٠٠٨ الى في اوائل القرن الحادى عشر تقريبا . و تعد هذه الرواية واحدة من روائع الأدب الياباني في العصر القديم .وتعكس هذه الرواية حياة النبلاء و البلاط الامبراطورى في ذلك الوقت من خلال تركيزها على المغامرات العاطفية لبطل الرواية الأمير هيكاو جنجي . و يحاول هذا البحث إعادة تأويل العلاقات الجندرية في الرواية وإظهار دلالة ظاهرة جنوح المرأة للدخول في طريق الرهبنة وتحولها من أميرة او تابعة للعائلة الامبراطورية الى راهبة بوذية و ذلك في محاولة لإثبات قدم الفكر النسوى في اليابان و أنه لم يكن وليد العصر الحديث كما أنه ليس وليد الثقافة الغربية , وانما يضرب هذا الفكر بجذوره في اليابان منذ القدم .

الكلمات المفتاحية: الفيمينزم,عصر هيآن ,سيرة الامير جنجي، موراساكي شيكيبو

はじめに

人類の歴史が進化するにつれて、人間関係はますます複雑化し、多様化していった。オーガスト・ベーベル（1840-1913）は著書『女性と社会主義』（*Women under Socialism*）の中で、原始社会における人間関係は単純であり、男女の違いはわずかであったと述べている。当時

の社会は母系社会であり、母親が家族の中心的存在として尊重され、高い地位と権利を持っていた¹。しかし、人類の進化とともに、農耕の発展、定住、集団形成、人口増加、社会的役割の分化、部族間の争いが進む中で、母系社会から父系社会へと移行していった²。このように、母系社会から父系社会へと移行する過程において、女性の地位は次第に縮小され、役割も男性に従属し、その欲望を満たす存在へと限定されていった。この構造は日本社会においても例外ではない。古代には、卑弥呼のように女性が統治者として君臨する例も見られたが、農耕社会の成立とともに、父権的な家族制度が確立され、女性の社会的地位は著しく低下した。以降、女性は男性の庇護を受ける存在として、その価値を男性の視点から判断されるようになった。このような女性の位置づけは、『源氏物語』にも明瞭に反映されている。物語に登場する多くの女性たちは、光源氏という男性主人公の欲望と感情の対象として描かれ、その存在意義はしばしば彼の満足に帰着される。また、人間社会の発展とともに、階級の形成や奴隷制度も出現した。ジョン・スチュアート・ミル（1806-1873）はその著書『女性の隷属』（*The Subjection of Women*）で、古代においては男性の大多数が奴隷であったと同時に、女性もまたすべて奴隷であったと述べている。しかし、時代が進むにつれて男性の奴隷制は廃止された一方で、女性の奴隷制は徐々に「従属」という形に変化していった³。つまり、男性が自由を享受する一方で、女性にはその自由が与えられず、男女間の不平等が続いた。ミルは同書⁴で、「男女間の権利の不平等は、主に力の法則に基づく⁵」と指摘している。これは、平安時代の宮廷社会にも通じる部分があり、女性たちは父や夫の権威の下に置かれ、自らの意思を十分に表現できる立場にはなかった。これらの西洋思想家の指摘は、平安時代におけるジェンダー構造の本質を浮き彫りにするための理論的枠組みとして活用可能である。

フェミニズム（女性解放思想）には、現在までに明確な定義が存在しないが、一般的には「男女間の差別をなくす思想」としてされる。この思想は、近代フランスでの自由運動や人権思想の高まりとともに形成され、19世紀後半には「フェミニズム」という言葉が広まった。この語は、ラテン語の「FEMINA（女性）」に由来し、1880年代にフランスで初めて使用された後、1890年代にイギリス、そしてその他の西洋諸国へと広がっていった⁶。

フェミニズムの歴史を語る際、西洋の研究ではフェミニズム思想が西洋起源であり、他の地域のフェミニズム運動はその模倣に過ぎないとする視点が主流である⁷。そのため、日本のフェミニズム研究においても、西洋の理論を基にした19世紀以降の女性解放運動を中心に論じられる傾向がある。しかし、日本におけるフェミニズム思想はそれ以前から存在していたと思う。19世紀に組織化された解放運動としてのフェミニズムが登場する以前から、女性たちは文学や詩を通じて不平等や男性優位に対する不満を表現してきた。たとえば、18世紀のメアリー・ウルストンクラフト（1759-1797）の『女性の権利の擁護』（*A Vindication of the Rights of Women*）は、女性解放運動の「聖典」とも呼ばれている。また、14世紀のクリスティン・ド・ピザン（1364-1430）は『貴婦人の町』（*The Book of the City of Ladies*）で、女性蔑視を批判し、男性からの虐待や暴力から守るために、女性たちが男性から離れた場所で暮らせる必要性を訴えた⁸。しかし注目すべきは、これらの西洋女性作家たちよりも6～7世紀も前に、日本の宮廷文化の中で紫式部が『源氏物語』を著し、同様に女性の抑圧的状况を描き出していた点である。当時の日本には近代的な「自由」や「人権」の概念は存在していなかったが、紫式部はその時代の制約の中で、女性の苦悩や不満、そして男性優位社会に対する鋭い批判を、巧妙かつ象徴的な文学表現によって描き出している。とりわけ『源氏物語』における女性登場人物たちの運命。たとえば、自らの意志で出家することによって男性支配から逃れる姿勢、あるいは男性主人公である光源氏の行為に対する作者の批評的なまなざしは、現代フェミニズムの定義（すなわち女性の低い地位に対する批判、構造的な不平等への抵抗、主体的選択の表現）と通底している。このように、紫式部の文学には、制度化された運動とは異なるものの、精神的・表現的なレベルにおいてフェミニズム思想の萌芽が認められる。したがって、「フェミニズムとは何か」を西洋近代に限定するのではなく、「女性が男性支配に対して抱く違和感や抵抗の意志」という観点から再定義することで、紫式部の文学もまたフェミニズム的思想の一形態として評価されるのである。『源氏物語』は、まさにそのような「時代の言葉で語られた女性の叫び」であり、静かながらも深い反抗の表現と読み解くことが可能である。

本研究では、西洋の女性が文学を通じて不満を表現したように、日本の女性もまた平安時代から文学を通じてその声を上げていたことを明らかにする。特に、このような文学作品の中で最も有名なものの一つが紫式部による『源氏物語』であり、これは 1008 年頃、すなわち 11 世紀初頭に完成したとされている。当然ながら、紫式部の作品以前にも、当時の女性たちの不満や不平を表現した女性作家による文学作品が存在していたが、その中で最も有名なのが紫式部の『源氏物語』である。なお、この作品は英語やアラビア語をはじめとする多くの言語に翻訳され、映画化やアニメ化、漫画化されるなど、広く知られている。本研究では、日本におけるフェミニズム思想が西洋に先行して存在していたこと、そしてその思想が文学という形を通じて表現されていたことを明らかにすることを目的としている。

先行研究

『源氏物語』は、平安時代に紫式部によって書かれた日本文学の金字塔であり、その研究は長年にわたり多角的に展開されてきた。原文は古典日本語で書かれているため、現代の読者には難解であり、多くの翻訳や現代語訳が行われてきた。特に、与謝野晶子や瀬戸内寂聴による翻訳は広く知られ、それぞれの時代の読者に深い影響を与えてきた。また、文学的・歴史的・言語学的観点からも様々な研究が蓄積されている。例えば、田辺聖子は古典文学における女性像の再評価に取り組み、女性の立場から『源氏物語』を読み直す試みを行ってきた。さらに、島田燐子は『日本のフェミニズム』において、古代文学の中に見られる女性の視点や社会的役割を論じ、フェミニズム的視点からの分析の重要性を提起している。英語圏においても、『源氏物語』に対するフェミニズム的アプローチは徐々に注目を集めている。Haruo Shirane の『The Bridge of Dreams: A Poetics of The Tale of Genji』(1998) は、多層的な物語構造や象徴性に注目しつつ、女性の位置づけにも考察を加えている。Melissa McCormick は、美術的・視覚的資料とテキストを併用しながら、女性表象と権力構造の相互関係を分析しており、ジェンダー研究と視覚文化を架橋する新しいアプローチを提示している。しかし、日本における研究において、フェミニズムの視点から『源氏物語』を本格的に再解釈した先行研究は依然として少ない。島田燐子が指摘するように、このテーマに関しては研究の数自

体が限られており、駒尺喜美の『紫式部のメッセージ』が例外的に挙げられる。しかし、同書では紫の上⁹という一人の女性キャラクターに焦点を当てており、他の女性登場人物や広範なジェンダー関係、出家や女性の社会的地位に関する包括的な分析は行われていない。本研究は、こうした先行研究の限界を踏まえ、紫式部の表現に内在するフェミニズム的思考の萌芽を多面的に分析し、女性登場人物の運命・選択・反抗の描写に注目することで、『源氏物語』の再解釈を試みるものである。とりわけ、男性中心的秩序に対する女性の内的抵抗や逃避行動(出家、沈黙、拒絶等)を文学的装置として読み解くことで、紫式部が当時の社会構造に内在する女性抑圧をどのように批判的に描いたかを明らかにする。

1- 平安時代における女性の歴史的背景と状況

日本の支配階級の歴史において、平安時代は藤原家が権勢を誇った時期であり、最も安定した時代とされていますが、一方で生産性や発展が欠如していた。日本の支配階級の歴史において、平安時代は藤原家が権力を握り、最も安定した時代であったが、生産性や発展の面では欠けていた時代でもあった。

古代末期、高貴な階級や貴族階級は労働を重視せず、日々を享楽や宴会に費やしたとされる。労働者への配慮や共感はほとんどなかった。藤原家が政権を握った際、その関心は専ら税の徴収に向けられ、中国への遣唐使や他国との外交関係は停止されていた。藤原家は権力を独占し、民衆の生活安定や福祉には無関心で、何か事件や問題が起これば神仏に祈願するという迷信的な方法を統治戦略として採用していた。平安時代以前の日本の宮廷においては、中国の唐王朝を模範として、皇帝が複数の妻や女性を持つ「後宮制度」が採用されていた。この時期、皇帝が抱える女性の数には一定の制限が設けられていたが、平安時代においてはその制限が解除され、後宮における役職や女性たちの地位に大きな変動が見られた。具体的には、「皇后」、「中宮」、「女御」、「更衣」、「御息所」、「御櫛笥殿」といった称号が使用され、それぞれの女性には特定の社会的地位が与えられた。

「皇后」という称号は、皇帝の正妻を意味し、「中宮」は皇后とほぼ同じ地位を表す別の名称であった。一方で、「女御」はおおむね五位に相当する地位に位置づけられていたが、平安時代に藤原家の勢力が強まると、女御が正妻である皇后に昇格することも可能となり、その地位は向上した。また、女御の人数には特に制限が設けられていなかった。

「更衣」という称号は、奈良時代末期から平安時代初期にかけて桓武天皇によって設けられたものである。「御息所」は、女御や更衣よりも低い地位であったが、平安時代中期には昇進して皇后となった例も存在した。また、「御櫛笥殿」は後宮における最下位の地位に属していた。もろさわ葉子の著書『おんなの歴史（上）』によれば、後宮に属する女性たち、すなわち皇帝の性生活に奉仕する役割を担った女性たちは、「寝室にいる役職」として公的な職務と見なされていたとされる。このため、もろさわは、たとえ皇后であったとしても、その生活は売春婦と本質的に大差ないものであったと指摘している。

平安時代において、女性たちは社会的・政治的生活から排除され、隔離されていた。彼女たちは父親によって政治的な目的のために利用され、愛や独立性が尊重される余地はほとんどなかった。藤原家の有力な人物である藤原道長は、政治的権力を掌握するために、4人の娘を4代にわたる天皇に嫁がせた。この戦略により、藤原道長は長期間にわたって影響力と権力を維持することができた¹⁰。

奈良時代の結婚制度は「妻問婚」と呼ばれていた。この制度では、男性が道や市場で気に入った女性に出会った際、その女性に名前や自宅の住所を尋ねることが求婚の意思表示とされていた。女性がそれに答えれば承諾の意を示すこととなり、男性はその後、夜に女性の家を訪れ、外で名前を呼んだり歌を詠んだりした。女性はそれに応じて彼を家に迎え入れ、朝になるとそれぞれの生活に戻るという習慣があった。

男性は通常、女性の本宅に近い「母屋」と呼ばれる家に宿泊し、昼間はそこを離れ、夜になると再び女性の元を訪れた。子供が生まれた場合、育児は女性の実家が主に担い、父親である男性は訪問者としての役割にとどまっていた。当時の女性は母親から財産を相続し、それによって自立した生活を送ることができたため、経済的に男性に依存す

る必要がなかった。そのため、男性の訪問が途絶えることが離別を意味し、女性が家の扉を閉ざし、男性の来訪を拒むことも離婚とみなされた。ただし、離婚に関する正式な手続きや財産の共有は存在しなかった。

この「妻問婚」の慣習は平安時代にも引き継がれたが、加えて「婿取婚」という結婚形式も存在していた。この制度では、男性が女性の父親を通じて歌や手紙を送ることで求婚し、女性は周囲の助言を受けながら返答を考え、最終的に承諾するという形が取られた。この結婚形式でも、男性は基本的に女性の家を訪れる形をとっていた。また、「妻問婚」と「婿取婚」のいずれにおいても、男性が同時に複数の女性のもとを訪れることは一般的であり、現代でいう「一夫多妻」に近い状態であった。当時の法律では一夫多妻制は禁止されていたものの、実際には習慣が法律よりも強い影響力を持っていたようである。

平安時代に入ると、結婚の形態にも変化が見られるようになり、男性が妻を自宅へ迎え入れ、一緒に暮らすようになった。また、平安時代の社会の発展に伴い、政府が人々に給与を支給する制度が整えられたため、生産活動への関心が薄れ、労働よりも消費が重視されるようになった。この変化により、女性は従来のように財産を相続することができなくなり、経済的に男性へ依存する傾向が強まった。その結果、女性が男性の家に留まり、働かずに生活することが一般的になり、それが女性にとっての生活保障と見なされるようになった。しかし、そのような状況の中で、女性にとって最も恐れるべきことは、男性の愛情が冷めることであった。なぜなら、一度男性に見放されれば、生活の保障を失い、経済的に困窮する可能性が高かったからである。そのため、女性は経済的な安定を確保するために、男性の機嫌を損ねないように細心の注意を払い、あらゆる手段を尽くして彼を満足させる必要があった。こうして、女性の男性への依存度は特に経済面において著しく高まり、結果として男性に従属せざるを得ない状況が生まれた

¹¹⁾。

2- 『源氏の物語』のあらすじ

『源氏物語』は、三部に分かれた構成で、第一部では源氏の誕生から30代後半まで第二部では、源氏が40代を迎え、52歳で亡くなるまでの人生が展開され、第三部では源氏の息子に焦点を当て、彼が28歳

に至るまでの成長が描かれる¹²。物語の時系軸はおおよそ 70 年にわたり、三世代（父、息子、孫）の物語が交錯している。

この作品は、日本文学における重要な作品であるだけでなく、平安時代の歴史や宮廷文化に関心を持つ読者にとっても貴重な資料となっている。『源氏物語』は、平安時代の宮廷や貴族社会を背景に、宮中の生活や貴族の家族関係、特に主人公源氏の恋愛模様を描いている。全 54 帖から構成され、物語には数多くの登場人物が登場し、男女間の複雑な関係が巧妙に描かれている。このように、文学的な奥行きと時代背景が見事に融合し、今なお多くの読者に影響を与え続けている。

3- 紫式部

紫式部の生涯には多くの謎に包まれており、その詳細はあまり知られていない。そもそも「紫式部」という名前は官職名に由来するものであり、本名は「藤原香子¹³」であるという説がある。彼女は当時の政権を掌握していた藤原氏の一員であったが、中流貴族の家系に生まれた。幼少期から聡明であり、兄よりも学問に秀でていたと伝えられている。当時、中国の漢字や漢文の学習は男子に限られていたが、紫式部は父が兄に教えている際に傍らで学び、その才覚を示した。それを見た父は、男性でなかったことを残念がったと言われています¹⁴。

紫式部は 28 歳または 29 歳のときに藤原宣孝と結婚した。当時、女性の一般的な結婚年齢は 14～15 歳であったため、彼女の結婚は比較的遅かったと言える。夫である宣孝は当時 45～46 歳であり、すでに前妻との間に紫式部と同年代の娘がいた。結婚後しばらくして、紫式部は夫が他の女性と関係を持っていることを知り、深く傷ついた。しかし、彼女はすでに娘の賢子（のちの大式三位）を出産しており、この娘は後に優れた女流歌人となる。紫式部の結婚生活は決して幸せなものではなく、夫からの十分な愛情を得られずに苦しんだ。しかし、その生活は長くは続かず、結婚からわずか 3 年後に夫の宣孝は亡くなった。

夫の死後、紫式部は 4～5 年間未亡人として過ごしたが、その後、藤原道長の娘である中宮彰子に仕える女房として宮廷に仕え始めた。道長が彼女を娘の女房として選んだのは、彰子に学問的な素養を身につけさせるためであったとも言われている。また、道長は紫式部に高品

質の紙、筆、墨を与え、彼女の執筆活動を支援した。この援助により、紫式部は『源氏物語』を完成させ、さらに後には『紫式部日記』を執筆することができた。道長は『源氏物語』の流布にも関与し、彰子に物語を読ませるなど、その普及に貢献したとされている¹⁵。

4- 登場人物の概要

『源氏物語』には多くの登場人物が登場し、特に女性の数が男性よりも多いことが特徴的である。これにより、物語の主軸は光源氏ではなく、むしろ女性たちに焦点が当てられているという見方もある。登場する女性たちは、主に上級貴族と中級貴族の二つの階層に分けられる。上級貴族に属する女性たちは次のようである。藤壺：光源氏の父帝の正妻。葵の上：光源氏の最初の正妻。六条御息所：元東宮妃で、元皇太子の妻で、源氏と恋愛関係にあった。朧月夜：右大臣の娘で、桐壺帝の妻である弘徽殿の妹。女三の宮：朱雀院の娘で、帝の命により源氏と結婚。弘徽殿：帝の正妻。中級貴族に属する女性たち（作者・紫式部と同じ階層）次のようである。紫の上：兵部卿官の娘で、光源氏の最愛の女性である。空蝉：紀伊の国司の妻。夕顔：式部卿官の愛妾。末摘花：常陸宮の娘。明石の君：光源氏の妻の一人。玉鬘：夕顔の娘。浮舟：大君・中君・小君：八の宮の娘たちである。これらの女性のほとんどが、光源氏と何らかの関係を持っており、妻、愛人、娘として彼の人生に深く関わる。男性の登場人物は次のようである。桐壺帝、内大臣、朱雀帝、夕霧、柏木、冷泉帝、左大臣、右大臣、兵部卿官、薫、匂宮 など。彼らもまた光源氏と密接な関係を持ち、物語の進行において重要な役割を果たす¹⁶。

5- 紫式部の影響と物語への投影

作者の個人的な経験や見聞や自分体験が物語には反映されることは否定できない。西沢正史の理論によれば、紫式部の影は空蝉・花散里・明石の君と言う三人の女性キャラクターに特にみられるとされる。彼女たちの共通点は、紫式部と同じ中級貴族の出身であること、そして貴族社会の中で微妙な立場に置かれていることだ。特に、空蝉と光源氏の関係は、紫式部と藤原道長の関係と類似しているとも言われる¹⁷。

しかし、紫式部の影響や影はこれらのキャラクターにとどまらず、物語全体に及んでいる。前述のように、紫式部は中級貴族の家柄に生まれ、比較的遅い年齢で結婚した。夫はすでに複数の妻を持ち、彼女より約17歳年上であった。結婚後まもなく、紫式部は夫の女性関係を知り、大きな悲しみと苦しみを味わった。夫の無関心に悩み、愛情の欠如に傷ついた彼女の経験は、『源氏物語』に登場する多くの女性たちの運命にも反映されている。物語の中で、光源氏に愛されながらも彼の浮気に苦しむ女性たち——例えば紫の上や葵の上、明石の君——は、まさに紫式部自身の経験を映し出していると考えられる。これらの登場人物を通じて、紫式部は当時の貴族女性が直面していた現実を繊細に描き出し、自らの感情を文学として表現したのであろう。では、これらの類似点は単なる偶然なのだろうか？それとも、紫式部自身の人生と意図的に重ね合わせたものなのか？紫式部は宮廷で女房として仕え、その生活の細部を間近で見聞きしていた。その経験は『源氏物語』の随所に反映されており、物語の中から彼女の宮廷社会に対する不満や違和感を感じ取ることができる。『源氏物語』は、当時の日本社会を如実に描写した作品であり、宮廷内の権力争いや后たちの複雑な関係を細やかに表現している。さらに、この物語は当時の女性の地位を映し出す鏡ともなっており、紫式部が抱いていた性別間の関係や倫理観に対する憤りや不満が、作品の中で巧みに表現されている。それは、作者自身の語りを通してだけでなく、登場人物たちの台詞や行動にも色濃く反映されているのである。

6- 小説における理想的な女性像

『源氏物語』は、平安時代の宮廷生活を映し出す歴史的記録であると同時に、その時代の思想や風習を反映した作品である。さらに、女性によって書かれた物語であることから、特に女性の状況や地位、当時の女性たちの状況や地位、男性たちの女性観を理解する上で貴重な資料となっています。物語の第二章では、理想的な女性像について四人の男性貴族が語り合う場面が描かれている。この会話を通じて、当時の社会における女性の地位や価値観が読み取れる。この話を切り出したのは、源氏の従兄であり、彼の正妻・葵の上の兄でもある頭中将であった。彼は、理想の女性について語り始め、それに応じて他の男性

貴族たちもそれぞれの意見を述べていった。話の内容は次のようなものであった。「君よ、理想の女性を見つけることなど決してできないだろう。例えば、字が美しく、手紙を書くのが巧みな女性がいるかもしれない。また、多くの女性は挨拶や社交辞令を上手にこなす。しかし、それだけの理由で彼女たちは傲慢になりがちで、他人を見下し、心の中では誰にも敬意を払わないものだ。また、両親に大切に育てられ、他人との接触を避けさせられ、理想的な女性になるようにと和歌を学び、音楽を習わされた娘の噂を耳にすることもあるだろう。そんな話を聞けば、君もその娘に会いたくなり、関係を持ちたいと思うかもしれない。だが、結局のところ、そのような評判は大げさに語られていることが多く、実際には彼女の両親が娘の価値を高めるために意図的に広めた作り話であることがほとんどだ。そして、君は気づいたときにはもう後戻りできない関係に巻き込まれてしまうのだよ」。引き続き彼の考えを次のように述べた。「貴族の娘たちは、たいいてい厳格な環境のもとで育てられ、宮中や邸宅の門を出る機会もほとんどない。ゆえに、我々は彼女たちを直接知ること、気軽に交わることもできぬ。それゆえにこそ、彼女たちは神秘的な魅力をまとい、まるで夢幻のような存在として人々の目に映るのだ¹⁸。」

この会話から、当時の理想的な女性像には「人目に触れず、他者と交わらず、家の中に閉じこもること」が含まれていたことが読み取れる。つまり、女性をある場所に閉じ込め、他者との接触を断つことは、当時の男性にとって魅力的な要素であった。それどころか、それが女性への強い惹かれを生む要因とされていた。同じ登場人物は引き続き次のように述べている「ある日偶然、古びた館の中に心を奪われるような美しい娘を見つけたとしよう。その館は長い年月の間に荒れ果て、雑草が生い茂っている。そして、その娘は長い間、誰にも知られることなく、たった一人で閉じ込められていたのだ。そういう娘を目の前にしたとき、人はたちまち夢中になり、どうすることもできなくなるだろう¹⁹。」このような考えは、『源氏物語』の中で繰り返し描かれている²⁰。

そして、頭中将の話は続き、当時の男性が妾を持つことを当然の権利として認識していたことを強調している。彼の言葉によれば、「もし、

ただ気軽に楽しむための妾を一人持つだけならば、それほど難しいことではないだろう²¹」。つまり、妾を持つことは特に議論するまでもなく、当たり前のことであり、何の困難も伴わないと考えられていたのである。そして、彼は再び理想の女性の特徴について語り始めた。その内容は以下の通りであった。

「彼女が若く美しく魅力的に見えることもあるだろう。しかし、やがて彼女が裏切りを好むことに気づけば、理性を失ってしまうかもしれない。別の女性は、料理や掃除など家事全般を好み、その腕前に驚かされることもある。だが、彼女はそれを誇りに思いすぎており、彼女の絶え間ないおしゃべりに頭が痛くなり、家のあらゆる細かいことにこだわる姿にうんざりするかもしれない。家具の木材の種類や製作地まで熟知し、服装や身だしなみに過剰なほど気を配るその姿に、次第に嫌悪感を抱くことさえある。しかし、同時に、全く身なりに気を使わず、髪を整えようとしめない女性にも嫌気がさすものだ。彼女は、すでに夫の家に落ち着き、子の母となったことで安心し、それがすべてであるかのように振る舞う。しかし、何よりもまず、彼女は“女性”であることを忘れてはならないのだ。我々男は家の外で多くの経験を積み、世の中の様々な事や驚くべき出来事を目にし、耳にするものだ。そして、家へ戻り、それらを妻に語ろうとしても、彼女はその話に熱心に耳を傾けることもなく、無表情で陰気な様子を見せるばかりだ。彼が面白い話をして、彼女はそれに共感せず、彼の冗談や皮肉の意味さえ理解しない。こうして、次第に彼は会話を続ける気力を失ってしまうのだ。

それならばと、そんな妻とは話しても無駄だと諦めたとしても、ある日、ふと面白い出来事を思い出してしまい、思わず笑いがこぼれ、つい独り言を呟いてしまうこともあるだろう。すると、妻は彼の奇妙な様子に驚き、「どうかしましたか？」と尋ねてくる。だが、このような状況においても、ただ妻を無視し、自分の世界に閉じこもるだけでは、何の解決にもならないのである。それゆえに、一部の者はこう言う。「世の中のことをあまり知らず、議論や対話を得意としない女性を見つけるのが最善である。そうすれば、結婚後に自分の望むように彼女を育てることができるのだ」と。しかし一方で、もし男が世間知

らずで頼りにならず、人との付き合い方もわからない女性と結ばれたならば、いずれ問題に直面することになるだろう²²」。

上記から、理想の女性像を推測することができる。それは、個性がなく、経験が乏しく、さらには愚かさを備えている女性である。まさにこの考えを、同じ会話の中である登場人物が次のように語っている。「だからこそ、私自身の経験から言えば、結婚相手として最も適しているのは、浅はかさや愚かさを感じさせる女性だと思う。こういった女性は付き合いやすいのだから²³」。

この会話における紫式部の不満は、彼の発言の矛盾を強調することで表れている。彼が求める理想の女性像には一貫性がなく、むしろその矛盾こそが、当時の男性たちの女性観の浅はかさや気まぐれさを浮き彫りにしていると考えられる。もしかすると、紫式部はこの矛盾を意図的に描き出し、男性たちの身勝手な価値観を皮肉っていたのかもしれない。その証拠に、彼の長い語りの直後に、彼自身の混乱ぶりを強調する一文が続いている。「こうして、左大臣の宮は長々と話し続けたものの、結局のところ、自分でも何を言いたかったのか分からなくなり、話の結論を見失ってしまったのである²⁴」。

紫式部は『源氏物語』の登場人物を通じて、当時の女性の立場を浮き彫りにし、同時に平安時代の男性心理を分析している。物語の主人公である光源氏は、当時の理想的な結婚相手としての女性像を要約している。それは、従順で、控えめで、議論をせず、反論もしない女性でなければならないというものである。そして、彼の口からは特に「弱さ」が求められる理由が語られるが、それは、彼自身が弱さを抱えていることを認めているためである。ここに、紫式部の視点が見え隠れし、当時の男性心理に対する鋭い洞察が表れている²⁵。「私はいつも、女性がか弱く、頼りない存在であるべきだと考えていた。そうでなければ、私は彼女を守り、甘やかしたいという気持ちになれないからだ。自信に満ちた強い女性を愛することは、私には到底できない。それは、おそらく私自身が感情的で弱い人間だからだろう。私は、女性は静かで従順であり、夫に従い、決して議論したり反論したりしないべきだと思う。そのような女性であれば、私は彼女を思い通りに育て、完全

に従わせることができる。そして、彼女と共に穏やかで平和な生活を送ることができるのだ²⁶」。

もろさわ葉子は平安時代を「愛が枯渇した時代」と評している。その時代は権力闘争が絶えず、女性の感情が顧みられることはなかった。さらに、女性の肉体的・精神的な成熟すらも考慮されることはなかった²⁷。このことは、『源氏物語』の随所に描かれている。例えば、祖母と十歳の孫娘の間に交わされた会話や、物語のある姫君（光源氏の妻の一人）とその乳母との対話に、それがはっきりと表れている。会話の内容は次の通りである。

尼僧は幼い少女に語りかけた。「お前はもう終わってしまった幼き日のままに生きている。他の娘たちは、お前と同じ年頃になれば自らの女性としての自覚を持ち、そのように振る舞うものだ。だが、お前はまだそのことを感じていない。亡きお母上は、十歳のときに父君を亡くされたが、その頃にはすでに物事をよく理解し、大人の女性のように立ち振る舞っていたのだよ²⁸。」また、乳母は若紫姫に語りかけた「私の愛しい姫様、いつまで子供のままでいるつもりですか？今年の始めからは、しっかりと決意を固め、一人前の女性として振る舞わなければなりませんよ。十歳を過ぎたら、人形遊びなど卒業するものである。あなた様はすでにご夫君を持つ身なのであるから、女性として、妻としての自覚を持たねばなりません。そうでなければ、私は安心できませんよ。今のままでは、他の女性たちのように髪を整え、美しく保つことすら気にしていないように見える。²⁹」この二つの会話から、当時の女性に対する扱いの一端が浮き彫りになる。それは、女性の心理的・感情的な側面が無視されていたという点である。最も重要とされたのは、たとえそれが本来の成熟よりも早くても、女性が「成熟した」と見なされ、夫に褒められ、満足されるような妻になることであった。『源氏物語』の中には、このように平安時代の女性の境遇を示す場面や会話が数多く描かれている。そして、それらすべてが共通して示しているのは、当時の女性の地位がいかに低かったかという現実である。また、当時の女性の心理的な感情や「他者を受け入れる余地」、つまり夫や愛人である男性に対しての気持ちに配慮されることはほとんどなかった。むしろ、多くの場合、女性は相手の男性に半ば強制的に関係を押し付けられることすらあった（これは後に見られる

具体的な場面でも明らかになる)。紫式部はそのような状況を描写しながら、女性がたとえ嫌悪や拒否の感情を抱いたとしても、ひとたび関係が始まれば、それが無理やりであったとしても、その女性は従うしかなく、関係を続けざるを得ないことを描いている³⁰。このように、女性に与えられた役割は「受け身」な存在であり、わずかに不満や抵抗の気配を見せる余地があったとしても、それを大きく表すことは許されないというものだった。

7- 物語におけるジェンダー関係

『源氏物語』はしばしばロマンティックな物語、あるいは光源氏の恋愛遍歴を描いた恋物語として知られている。そして物語の中でも、光源氏の美貌が繰り返し称賛されている。しかしながら、この物語を再読し、再解釈することによって、もろさわ葉子の「本当の愛を求めながらも、それを手にすることができなかった平安時代の女性たち、特に貴族階級に属する女性たちの苦悩を描いた作品である³¹」という指摘が裏付けられるのである。このように見直してみると、物語における多くの恋愛関係は、当時の女性たちが経験した心の葛藤や社会的制約、そして本当の愛が得られないことへの苦悩を描いており、ジェンダー関係に関する重要な視座を提供している。たとえ作者が物語の中で光源氏の容姿の美しさや魅力を四十回³²以上も繰り返し描写していたとしても、物語全体を通じて明らかになるのは、源氏や他の男性登場人物が女性たちに対して冷淡であったり、ぞんざいに扱ったりした場合、作者はそうした男性たちを決して免責していないという点である。それどころか、彼らの行動は物語内でしばしば「罰」や「報い」として描かれており、作者の鋭い批判的視点が見て取れる。

このようなジェンダー関係、とりわけその中心にいる光源氏との関係を考察することで、紫式部が『源氏物語』を通して単に光源氏の美しさや魅力を描くことを目的としていたのではないことが明らかとなる。むしろ、彼女の真の意図は、当時の女性たちが直面していたジェンダー関係の醜さを浮き彫りにすることであったと考えられる。光源氏が関係を持った数多くの女性たちとのやりとりを分析すると、彼が一方的に女性を傷つけた結果として、女性からの非難を受けたり、自責の念に駆られたり、あるいは女性あるいは「天」の力によって報い

を受けるという描写が繰り返されている。これらの描写は、紫式部が当時の女性の地位の低さや、女性が男性の快樂の道具としてのみ扱われていた現実に対して強い批判的意識を持っていたことを示している。女性が自らの意思を持ち、男性に対して異議を唱えることすら困難であった時代において、紫式部は文学という手段を通して、女性の声なき声を代弁し、ジェンダー不平等に対する深い憂慮と反発を物語の中に織り込んでいたのである。本研究では、物語の中心人物であり主人公でもある光源氏と、彼が関係を結んだ女性たちとの間に見られるジェンダー関係、すなわち彼の恋愛関係について簡潔に概観する。これらの関係性の検討を通じて、『源氏物語』におけるジェンダー構造の特質と、当時の女性の社会的地位や心理的状况を読み解く手がかりを得ることができる。

7.1 空蝉と光源氏

空蝉は「紀伊守」の正妻であり、中流貴族階級に属する女性である。この階級は、作者である紫式部自身の出自とも重なる。空蝉は『源氏物語』において、光源氏による不当な扱いを最初に受けた女性の一人である。物語の中で、源氏は紀伊守の厚意によりその邸宅に宿泊することを許されるが、その恩を裏切り、強引に空蝉との不義の関係を結んだ。空蝉はこの出来事によって深く傷つき、心身ともに大きな苦しみを味わうことになる。こうした描写は、当時の女性が置かれていた不平等な立場と、望まぬ関係を強いられる現実を浮き彫りにしている。

7.2 夕顔と光源氏

夕顔は、頭中将の愛人であり、また中流貴族に属する女性でもある。彼女は光源氏の正妻・葵の上の異母兄である頭中将の元恋人であった。夕顔は源氏との間に娘・玉鬘をもうけるが、その後、突然姿を消し、源氏の人生から離れていくこととなる。源氏は、友人である頭中将が今なお夕顔を想い、行方を捜していることを知っていながら、彼女の所在を知らせず、彼女と密かに関係を持ち続けた。また、夕顔に対しても、頭中将の想いや探し続けていることを伝えることなく、自らの欲望を優先させていた。このような行動は、源氏の女性に対する独占的な姿勢と、友情や倫理よりも自己の欲望を優先する性格を露わにしている。紫式部は、このような源氏の振る舞いを通して、当時の貴族

男性の利己的な恋愛観や、女性の感情や幸福がしばしば無視されていた現実を批判的に描いている。夕顔の静かな存在と儚い運命は、そうした時代の女性の立場の脆弱さを象徴しているといえる。

7.3 若紫と光源氏

若紫は、光源氏にとって理想的な妻とされている。というのも、彼女は源氏が理想とするすべての資質を備えており、幼少期から彼の手によって従順かつ素直な女性として育てられたからである。この関係においては、若紫の個人的な感情や主体性が軽視されており、物語全体を通じて見落とされがちな、女性の心の葛藤や抑圧された思いが浮き彫りとなっている。紫式部は、この若紫と源氏の物語を通して、当時のジェンダー関係の歪みや不平等な構造をあぶり出している。彼女は単なる理想の妻として描かれるのではなく、むしろその理想像がいかにして女性の自由と感情を抑圧するものであるかを示す象徴的な存在となっている。以下では、物語の中でも特に重要な女性登場人物の一人である若紫と光源氏の関係について、さらに詳しく考察を加えていく。源氏が若紫に初めて出会ったのは、病の治療を終えて帰路に着いた際、ある家を覗き見た時であった。彼女は当時わずか十歳であり、源氏は彼女の姿に藤壺の宮——禁断の恋の対象であり、彼の実母に似た女性——との共通点を見出し、深い興味を抱いた。そして祖母の死を機に、若紫を父のもとに戻る前に誘拐し、自邸へ連れ帰り養育した。この行為には、父親のような愛情と夫としての欲望が交錯しており、紫式部はその矛盾を意図的に描き出している。作中では、若紫が源氏の腕の中で眠る際に、まるで父のぬくもりに包まれているかのように安心感を覚える³³描写が繰り返されている。「源氏は彼女に漢字の書き方やさまざまな学問を教え、誠実さや礼儀正しさといった美德を身につけさせようとした³⁴」。「彼女の世話をしているうちに、源氏はまるで行方不明になった自分の娘を、他の家族に育てられた末にようやく取り戻したかのような感覚を抱くようになった³⁵」。「妻を亡くし、ひとり娘を守り育てる父親のような感情にとらわれ、できる限り母親の愛情を補おうと努めながら、彼女と離れて夜を過ごさなければならぬたびに、深い心の痛みを感じていた³⁶」。しかし、紫式部はその後、若紫が源氏を避ける描写を通じて、父性から性愛への急激な

移行に対する彼女の混乱と嫌悪を鮮やかに描いている。「ある夜、源氏がこれまでのように優しく抱きしめるのではなく、恋人としての接触を試みたことにより、若紫は深い羞恥と戸惑いに襲われる。翌朝、それを思い出すたびに嫌悪感が込み上げ、かつて父のように思っていた源氏の姿が穢れた存在へと変化してしまった³⁷」。

紫式部は意図的にこのような矛盾に満ちた描写を用いており、源氏の行為が容認しがたいものであることを暗示している。彼を直接的に非難することなく、その行動の醜悪さを際立たせることで、読者に強い印象を与えるのである。また、紫式部は物語全体を通して、源氏をはじめとする男性たちの女性に対する不適切な関係性を批判し続けている。彼女は、男性中心の社会に対するメッセージを、源氏自身や他の登場人物たちの口を通して巧みに語らせるという、いわば「逆説的表現」によって伝えているのである。そして紫式部は、物語の中で一貫して若紫の美しさを強調し、源氏にとっての理想の女性像として描いている。また、源氏が彼女との生活において深い幸福を感じていたことも繰り返し描写されている。しかし、そのような愛情表現とは裏腹に、源氏は他の多くの女性たちとの関係を絶つことはなく、さらには前帝の娘との結婚をも果たしている。このように、彼の若紫への「愛」を語る言葉とは対照的な行動が続いている点から、紫式部は表面的な愛の言葉と実際の行動との乖離を鋭く描き出しているのである。

7.4 藤壺中宮と光源氏

源氏と藤壺中宮との関係は、彼女が父帝の正妻であったことから、当時の倫理観に照らして明らかに禁忌とされるものであった。藤壺は幼少期の源氏に深い愛情を持って接し、まるで実母のように彼を慈しんだが、成長した源氏は彼女に恋慕の情を抱くようになり、その姿は常に彼の心に焼き付いて離れなかった。これは、紫式部が描いた源氏の性格、すなわち「手に入れがたいものを欲しがる性向」や「困難な恋に惹かれ、成就したときの高揚感」を象徴していると考えられる。源氏は藤壺への思慕を断ち切れず、その代替として彼女に酷似した紫の上を引き取り、育てて妻とした。しかし、ある日、病に伏した藤壺が実家に戻った際、源氏はその機を逃さず、彼女の女房の協力を得て寝所に忍び込み、ついに一線を越えてしまう。源氏はこの関係を悔い、その罪の重さに怯えることになるが、藤壺が懐妊し、やがて男児（の

ちの冷泉帝)を出産したことによって、状況はさらに複雑化する。帝(源氏の父)はその子を自分の子と信じて疑わず、結果として源氏の息子が、自らの異母弟として育てられることとなったのである。

7.5 末摘花と光源氏

源氏はまた、常陸宮の娘である女君・末摘花とも関係を持つに至った。彼女は父親の死後、女房たちと共に父の邸でひっそりと暮らしていたが、源氏がこの女性に関心を抱いた背景には、右大臣家の若宮(内大臣)が彼女と文を交わしているという噂が関係していた。源氏はこの恋の競争に勝ちたいという思いから、内大臣に先んじて彼女のもとを訪れ、関係を持つに至る。

しかしながら、源氏はその後彼女に対する関心を失い、長い間彼女の存在を忘れてしまう。その結果、末摘花は誰にも顧みられず、邸で飢えに瀕するほどの困窮に陥った。女房たちも次第に彼女のもとを離れ、孤独と貧困の中で過ごしていたが、最終的には源氏が偶然のきっかけで彼女の存在を思い出し、再び訪れることとなった。

7.6 朧月夜と光源氏

桜の宴が宮中で催された折、源氏は酒に酔い、酩酊の末に右大臣家の娘である女君・朧月夜と強引に関係を持ってしまった。朧月夜は、正妻である皇后・弘徽殿女御の妹であり、上流貴族の出身であった。彼女は、将来的に帝の正妻となることが内定していたが、源氏との関係が発覚したことにより、その道は閉ざされてしまった。源氏はその後も朧月夜との密会を続けていたが、ある夜、ついに宮中で二人が密通している場面が露見するに至る。この事件は大きなスキャンダルとなり、源氏は都から追放される処罰を受け、愛する若紫をはじめとする妻たちや所有していた邸宅など、すべてを後にして京を去ることになった。

7.7 六条御息所と光源氏

六条御息所は、かつての帝の御妃であり、高貴な出自を持つ女性であった。源氏は、彼女と一時的に親密な関係を築き、彼女の邸を訪れることもあったが、やがて他の女性たちとの恋愛関係に夢中になったた

め、次第に六条御息所を疎かにしていった。また、六条御息所の繊細で誇り高い性格は、奔放で多情な源氏の気質とは相容れず、両者の間には徐々に心の距離が生じた。その結果、彼女は深い悲しみと屈辱を抱くようになり、それが物語の中で彼女の霊的な存在としての表出につながっていく。

7.8 葵の上と光源氏

葵上は、左大臣の娘であり、源氏の正妻であると同時に従姉でもあった。彼女は上流貴族の出自を持ち、源氏よりも四歳年上であった。二人の間には夕霧という一子がいたが、源氏は彼女に対して冷淡であり、夫婦関係は円満とは言えなかった。これは、源氏の多くの恋愛遍歴が葵上の心に不安と不快感を引き起こし、夫婦間の緊張を高めたためである。特に、源氏の他の女性たちへの関心が、葵上にとって嫉妬と屈辱の源となり、彼女は精神的に追い詰められていった。その中でも、六条御息所との間で強い対立が生じた。六条御息所は、葵上に対する嫉妬心から、怨霊となって葵上の身体に取り憑いたとされ、最終的に彼女はこの霊的な攻撃によって命を落とすことになる。

7.9 明石と源氏

源氏は、女三の宮（朧月夜の君）との不義密通が露見したことにより、都を離れ須磨に流されることとなった。その流謫中、播磨の国明石に滞在し、そこで明石入道の娘である明石の君と出会い、婚姻関係を結ぶに至った。この関係により、後に一人の女兒が誕生する。彼女こそが後に東宮に入内し、中宮として高位に昇ることとなる「明石の姫君」である。源氏が赦免され都に帰還した後、当初明石の君を都に伴わず、明石の地に残したままであった。しかし後に彼女と娘を都に迎え入れたものの、娘を正妻である若紫の養女として育てさせることを選んだ。この措置は、明石の君にとっては深い悲しみと疎外感をもたらすものであった。

7.10 玉鬘と源氏および髭黒の大將

玉鬘は、右大臣家の血筋を引く正統な姫君であり、その父は内大臣（右大臣家の若宮）、母は夕顔であった。母の死後、乳母の夫に伴わ

れて筑紫へ下向し、長くその地に留まっていた。乳母の夫の死後も、彼の家族のもとで生活を続けていたが、地方武士との婚姻話が持ち上がったことを機に、乳母の息子たちの計らいにより、玉鬘は再び都を目指すこととなる。帰京の途上、偶然にも母・夕顔に仕えていた侍女・阿閑と再会し、その縁で源氏の君のもとへ身を寄せることとなった。源氏は、亡き夕顔への追慕の念からか、玉鬘を側に置き、彼女を自身の後宮に迎えようと試みたが、その矢先に髭黒の大將が強引に彼女を自邸へ連れ去り、既成事実をもって妻とした。

7.11 式部卿宮の姫君

式部卿宮の姫君は、髭黒の大將の正妻として迎えられ、彼との間に二人の男子と一人の女子をもうけた。しかしながら、髭黒の大將が玉鬘に心を移し、ついには彼女を妻として迎えたことで、姫君は深い心の傷を負うこととなった。夫からの継続的な冷遇と蔑ろにされた境遇により、姫君は次第に精神の平衡を失い、ついには正気を失うに至った。このような境遇の中、姫君は娘を伴って実家である式部卿宮の邸宅へ戻り、以後は父の保護のもとで過ごすこととなった。

7.12 雲居の雁と夕霧

雲居の雁は、内大臣の娘であり、光源氏の息子である夕霧の正妻である。幼少の頃より夕霧とは相思相愛の間柄であり、成人後に正式に結ばれ、複数の子をもうけて円満な家庭を築いていた。しかし、長い年月の後、夕霧は父源氏の若き日の振る舞いを彷彿とさせるように、一人の妻だけに満足することができず、その誠実さを捨てて、複数の女性と関係を持つようになった。とりわけ、彼が亡き柏木の正妻であった女二宮と再婚したことは、大きな波紋を呼んだ。夕霧はこの婚姻を自身の望みによって強行し、女二宮の意思を顧みることにはなかった。

7.13 女三の宮と光源氏・柏木

女三の宮は、朱雀院の御息女であり、帝の寵愛を一身に受けた姫君であった。そのため、朱雀院は娘を一人世に残すことを憂い、信頼のお

ける人物に託すことを望んだ。その候補として白羽の矢が立ったのが、すでに栄華を極めた光源氏であった。源氏は当初こそ逡巡したものの、やがて女三の宮を正妻として迎え入れ、六条院に住まわせることとなった。しかしながら、女三の宮のあまりの若さと無垢さは、源氏にとって物足りなさを感じさせるものであり、心は完全には通じ合わなかった。そんな中、女三の宮の姿を偶然目にした柏木は、そのあまりの美しさに心奪われ、理性を失い、遂には源氏の留守を狙って六条院に忍び込み、女三の宮に対して暴挙に及んだのであった。

7.14 大君と薫

大君は、八の宮——すなわち光源氏の異母弟にあたる人物——の御息女である。彼女の気品と慎み深さは多くの人々を魅了したが、とりわけ薫の君の心を深く捉えた。薫の君は名目上、光源氏の実子とされているものの、実際には柏木の君が女三の宮との密通によって生まれた子であり、その出生には複雑な事情があった。薫は大君に強い想いを寄せ、しばしば彼女のもとを訪れたが、大君自身はその想いに応えることなく、常に距離を保ち続けた。彼女の中にあっただのは、父八の宮の意志と、自身の誇りと慎みであり、世俗的な恋愛に身を投じることを潔しとしなかったのである。このようにして、薫の君と大君との関係は、決して結ばれることなく、彼女の早世によって幕を閉じることとなった。その儚さと悲劇性は、「宇治十帖」における重要な主題の一つとして、深い余韻を残している。

7.15 中君と匂宮

中君は、大君——すなわち大君——の妹にあたる女性であり、宇治に住まう八の宮の御息女の一人である。姉である大君に深い愛情を抱いていた薫は、その想いが叶わぬまま彼女の早世に直面した。大君の死後、薫は妹である中君にもまた好意を寄せ、たびたび求婚の意を示したが、中君自身の気持ちは曖昧であり、積極的に応えることはなかった。このような中、匂宮——すなわち光源氏の孫にあたる人物であり、女好きとして名を馳せていた——が中君に関心を寄せるようになった。姉である大君からの勧めもあり、最終的に中君は匂宮と結婚し、一子をもうけるに至った。

7.16 浮舟と薫・匂宮

浮舟は、中君の異母妹にあたる女性であり、母の手により中君のもとへと預けられ、その庇護のもとに暮らしていた。然るに、匂宮はこの若き姫君の存在を知り、ある夜、彼女の私室に忍び入り、強引に抱き寄せんとする非礼を働いた。これを見かねた侍女が彼女を救い出し、浮舟は姉のもとを逃れた。その後、浮舟は薫君と結ばれ、彼の正妻——帝の御息女——のもとへの参内が多い薫に代わって、その家に留まることとなる。然るに、匂宮はこの隙について再び彼女のもとへ通い、夜陰に乗じて己こそ夫であると偽って関係を結んだ。浮舟はこれを拒絶できぬまま、両者との関係を続けることとなり、その秘事が露見した折には、薫の君は烈火の如く怒り、侍者を遣わして彼女を守らせるに至った。一方、匂宮は浮舟を奪わんと画策し、彼女を薫から引き離すことを企てた。されど、浮舟は二人の貴公子の間で心を惑わされ、恐怖と混乱のあまり、最終的には両者のもとを逃れて姿を消すという、悲劇的な結末を迎えるのであった。

8- 物語におけるフェミニズム思想

物語の題名からは、あたかも光源氏を中心とした物語であるかのような印象を受けるが、物語の内容を精査すると、その真の目的は女性たちの境遇を描き、それについて論評することにあると読み取れる。光源氏という男性主人公は、当時の男性社会を代表する存在として描かれ、その人物を通して紫式部は女性たちの立場を浮き彫りにし、男性中心の社会構造を批判している。表面的には光源氏を美男として描いているが、物語を通して彼の女性に対する非道な行為や不誠実な態度が繰り返し示され、作者はその行動に対して批判的な視線を向けている。むしろ、物語中では女性登場人物たちの行動を通じて、光源氏の行いに対する報いが描かれ、女性の視点からの復讐という形で作者の批判が表現されている。また、物語冒頭から光源氏の人物像は、直接的な言葉を用いることなく、その内面の醜さが巧みに描かれている。たとえば、彼が実父の正妻である藤壺宮に心を寄せ、既に正妻（葵の上）がいるにもかかわらず禁断の恋に溺れる様子などは、彼の道徳心の欠如を端的に示しており、紫式部はそのような描写を通して、読者に彼の行動の不自然さや不当さを伝えているのである。

8.1 空蟬

空蟬は、身分こそ中流貴族に過ぎないが、慎み深く理知的な女性として描かれている。彼女は既婚者でありながら、源氏との関係に巻き込まれてしまう。源氏は空蟬に一方的な興味を抱き、彼女の意思を顧みず、彼女のもとに忍び込んで関係を強行する。「源氏の君は、自らの行いが誤っていることを自覚しつつも、良心の呵責に苛まれながら、まるで何かに操られているかのように静かに足を運び、ついに眠っている女性のもとへとたどり着いた³⁸」。この出来事は空蟬にとって非常に屈辱的なものであり、以後彼女は源氏との接触を避け、徹底的に身を引くという選択をする。空蟬のこの態度は、当時の女性としては非常に稀有な強さと自己決定権の行使を示している。同時に、彼女の静かな抵抗は、源氏に対しても深い印象を与え、後に彼が後悔と未練を抱く原因ともなる。このように、紫式部は空蟬の人物像を通じて、女性の尊厳と内面の強さを繊細に描写しており、ジェンダー関係の不均衡に対する批判的な視点を表している。彼と関係を結んだ空蟬の姫君は、その後の言動において紫式部の批判的視点を体現している。源氏に対する冷淡な態度、そして後の逃避は、彼の行為に対する拒絶の意思を明らかにしており、彼女の台詞にはその苦悩と後悔が滲み出ている。「もし、私たちがもっと早く出会い、誰にも縛られることなく愛を育むことができたなら、今ごろ私はどれほど幸せだったでしょう。けれども、私はすでに他の人の妻。いまこうして起きてしまったことは、私にとって耐えがたい苦しみと悲しみでしかありません³⁹」。

8.2 夕顔

光源氏は、友人である右大将の愛人夕顔と関係を持ち、その結果として彼女に子を産ませたばかりか、宮中における愛人の一人である六条御息所（女三の宮）をも放置し、冷遇した。その報いとして、紫式部は二つの方法で彼を罰した。第一の方法は、光源氏が見た夢の中に現れた女性の霊が、彼に対して恨みの言葉を述べる場面である。夢の中でその女性はこう訴える。「これほどまでにあなたを愛し、今日まで誠を尽くしてきたというのに、なんとあなたは冷酷で恩知らずな人なのでしょう。私はあなたに対して怒りと深い悲しみを覚えています⁴⁰」と。この夢は光源氏の心に深い印象を残し、目覚めた後も彼を苦

しめた。第二の方法は、夕顔の死を通して示されたものである。紫式部は次のように語っている。「あの女性を襲った出来事、そして彼を襲った悲しみは、もとをただせば、決して手を出してはならぬ女性に対する、あの愛情と関係に起因するものであった。それはまさに罰、あるいは呪いの一種であった。そのような考えが光源氏の脳裏に浮かび、彼は恐怖に打ち震え、これから自分の身に何が起こるのかと怯えるのであった⁴¹」。このように、紫式部は光源氏の内面に生じた「不安」や「後悔」といった感情を通して、間接的に彼の行為を批判し、自身の倫理的立場を読者に伝えている。これは、彼女の作品における女性視点からの批評手法の一端であり、物語全体におけるフェミニズム的な要素の表れでもある⁴²。

8.3 若紫

若紫と光源氏の関係は、他の姫君たちとは異なる特別なものである。若紫は、源氏が心密かに思い続けていた禁断の恋人・藤壺の宮に容姿が似ており、彼女の面影を宿している。また、源氏が理想とする女性像を体現する存在でもある⁴³。彼自身の手によって育てられた彼女は、日本の楽器演奏に長け、その技術は源氏の教えによるものである。さらに、嫉妬や不満、倦怠といった感情を表に出さないよう心得ており、それもまた源氏のしつけの賜物であるとされている。しかし、このように理想的な女性であるにもかかわらず、源氏は若紫を裏切り、他の女性たちとの関係や再婚を繰り返す。これは、彼の不実さと移り気な性格を如実に表している。紫式部は、ここでも直接的な非難を避けつつ、巧みに不満や批判を表現している。若紫の口を借りて、彼女に次のような言葉を語らせているのである：

あはれなるかな、昔物語の中のことなれど、今の世にもかくのごとくあらはるることの、いかばかり多かるらむ。男ども、うたて心うつろいやすく、忠ならぬ契りを交はし、女どもは、かかる心もとなき契りに結ばれて、いとど運命にさすらふことのみ多く。しかるに、古の物語の多くは、女、つひには頼むべき男に引かれて、世を安らかに送りぬといへり。されども、なにゆゑに我は、浮草のごとくに心の根もなく、定めなき風に吹かれ、日ごと夜ごとに乱れ惑ふのみなるや。あの御方の、いとも移ろひやすき御心に、けふもまたあしたも惑はされて、

つひに安からぬ年月を送る、われながら情けなきことなり。いときなくも、「そなたは幸ひなる人なり。何の不足もなく、やすらげく暮らす」と仰せらるれど、さはれ、物の具は足りぬとも、かくまで御心うつろふさまを幾たびも見て、いかで安き日を思ひ得むや。あな、口惜しや。われ、このままに老い、果てなんことの、いかばかり憂きことにやあらむ⁴⁴。

若紫は、自身の語りにおいて「恵まれた生活を送っている」と述べてはいるものの、その心中には、源氏の浮気や裏切りに対する深い苦悩と屈辱が満ちていた。紫式部は物語の随所において、若紫が抱えるこの抑圧された感情を繰り返し描写しており、それが次第に彼女の心身を蝕み、病に倒れるまでに至ったことを強調している。そして、最終的に若紫は病により世を去る。これは、源氏の女性関係に対する無責任さと、それにより傷ついた女性の行く末を象徴する出来事でもある。紫式部は、若紫の死という形で、源氏の行動に対する批判を文学的に表現しているのである。若紫の死後、源氏は深い喪失感と後悔の念に苛まれ、自らの過ちを悔い、世俗的な生活に対する執着を失っていく。その変化は、源氏の物語全体における大きな転換点となり、同時に紫式部の女性に対する深い共感と、男性中心の社会に対する批判的視点を如実に物語っている。

8.4 藤壺中宮と女三の宮

「かくて源氏の君、胸を裂かむばかりの煩悶に日を送り給ふ。もしや、かの御腹の児、我が忍びたる契りの果てならむと思し召すに、姫君の御嘆きいかばかりと、思ひやられては、心惑ひてまどろむ夜もなし。ましてや、もし父帝このことを知らせ給はば、御顔のいかに曇らむと、想像するだに胸塞がりて、狂はむばかりの心地す。あまりの不安とおそれに、夜半も御目覚め給ひ、寝られ給ふことあらず⁴⁵」。紫式部は、源氏が自らの過ちに深く後悔し、苦悩する様子を描いた後も、そこで筆を止めることはなかった。彼女は、まるで因果応報を示すかのように、同じような出来事を源氏自身に体験させることで、静かなる復讐を果たした。すなわち、かつて自ら父帝の妻・藤壺と密かな関係を結び、皇子をもうけてしまった源氏は、後に、自邸にて最愛の妻・女三の宮が、柏木により関係を迫られ、子をもうけるという、同じような

出来事を目の当たりにすることとなった。この時、紫式部は次のように語る。「その時に至りて、初めて源氏の君、亡き桐壺の帝の御心中を思ひ至り給へり。されば、かの秘めたる契りのこと、すでに帝の知ろし召しつるものの、世の聞こえを恐れ給ひて、あえて知らぬ体にて過ごし給ひしなりと、今さらに悟り給ふ。あさましきかな、わが行ひの深き罪、思ひ知らるるに、身の毛もよだちて、末の世の報いをも怖ぢ給ふ。ああ、まことに「身から出でたるさび」とはこのことなるべし、世の習ひは、かくも恐ろしきものにこそあれ⁴⁶」。

8.5 末摘花

光源氏と常陸宮の姫・末摘花との関係は、源氏の哀れみと罪の意識によって続いていたが、その始まりは決して美しいものではなかった。源氏はある夜、姫君のもとを訪れ、無理やり関係を結んでしまったのである。この出来事後、姫の御方付きの女房は、源氏に対して次のように語った。「姫君はまことにお気の毒でございます……。ご存じのとおり、橘の姫君は人付き合いを好まず、つつましくお過ごしの方。それが、あの夜以来、深い恥と悔しさに打ちひしがれ、心の痛みに耐えておられるのです。ますます心を閉ざされ、物も申されず、人との交わりを恐れておいでです。朝な夕な、涙とともに日々をお過ごしになっております⁴⁷」。この女房の悲しげな言葉に、源氏は胸を打たれ、自らの行いが姫君にもたらした苦しみに対し、深い憐れみと悔恨の情を抱いたのであった。

8.6 朧月夜

朧月夜の君は、先にも述べたように、源氏の君の兄君である帝の御后に選ばれていた方である。しかし、源氏の君はいつものごとく、容易には手に入らぬものにこそ心惹かれる性質であったゆえ、彼女とも密かに関係を結んでしまったのであった。今回、紫式部が源氏に与えた罰は、「流罪」と「流刑の地での苦悩」であった。都での不義が露見し、朧月夜との関係が原因となって、源氏は須磨へと追いやられた。その後、異母兄である帝が崩御したことにより、源氏は赦され、再び都に戻ることもあった。源氏は朧月夜のもとを訪れ、再び関係を築こうとした。彼女は幾度もこれを拒み続けたが、源氏の執拗な想いと強

い働きかけにより、一時的にかつての關係が復活することとなった。しかし、朧月夜はやがて決断を下した。源氏のもとを離れ、俗世を捨てて仏門に入る道を選んだのである。その決意は、自らの人生を自らの手で定める強さと、過去との決別を意味していた。源氏にとっては、それがまた新たな喪失と痛烈な悔恨を伴う出来事となった。

8.7 葵の上と六条御息所

葵の上⁴⁸と六条御息所⁴⁹二人の姫君は、いずれも源氏からの冷遇と、彼の絶え間ない女性遍歴に苦しめられた。その運命は奇しくも交差し、深く関わり合うこととなる。葵の上は、六条御息所怨霊に取り憑かれたことにより命を落とし、源氏に深い悲しみと重い罪の意識を与えた。しかし、宮すどころの怨念はそれだけでは終わらなかった。彼女の怨霊は、源氏が理想の女性として育てた若紫にも取り憑き、病に倒れさせたのである。そして、その病がもとで若紫も命を落とすこととなり、源氏はついに女性を、そしてこの世の栄華そのものをも厭うようになる⁵⁰。このようにして、紫式部は怨霊という超自然的な力を用い、源氏の罪と傲慢さに対する報いを描いているのである。

8.8 玉鬘と式部卿宮

玉鬘と式部卿宮に関しては、彼女たちの人生が源氏および髭黒の大將との複雑な人間關係によって深く交錯しており、紫式部はこれを通じて平安時代における女性の苦悩と社会的不平等を鋭く描出している。まず、玉鬘は源氏に保護されていたが、彼女に対する源氏の感情は次第に父性愛を超えたものへと変化し、それにより玉鬘は心理的葛藤に苦しむこととなった。これに対して、源氏の実子である夕霧は、父の行動に強い憤りを覚え、次のように語っている。「一体、父上に何が起こったのだろうか。まるで目に映る女性全てを手に入れようとするかのように、自らの娘のような存在にまでそのような感情を抱くとは……。幼い頃から自らが育てていなかったことが理由であったとしても、それが許されるものではない⁵¹」。さらに、玉鬘は髭黒の大將によって強引に妻とされ、本人の同意や愛情がないままに結婚を強いられた。これもまた、当時の女性が置かれていた受動的かつ不平等な立場を象徴する事例である。一方、式部卿宮は、正妻でありながら髭黒の大將に冷遇され、その結果として精神的に追い詰められ、最終的に

は心の均衡を失うに至った。このように、紫式部は女性たちが直面する理不尽な状況や抑圧を具体的な人物像を通して描写している。また、物語の展開の中で、源氏自身も報いを受ける。かつて彼が関心を寄せていた若い女性が、今度は髭黒の邸に迎え入れられ、彼の妻となる。年齢差を考慮すれば、その関係はまるで親子のようであり、源氏にとっては大きな屈辱であった。このような複雑な人間関係を通じて、紫式部は女性が夫や恋人から受ける暴力、無理強い、二番目の妻としての扱い、そして正妻としての苦悩など、あらゆる形態の抑圧と不条理を浮き彫りにしているのである。

8.9 雲居の雁

「婦人に関することについて、かつて父帝の忠告に耳を貸すことなく、数知れぬ恋の遍歴を重ねてまいった。今となつては、己の歩んだ道の過ちに気づき、我が子には同じ轍を踏ませたくないと願っておる。しかしながら、我が如き者が忠告を与える資格を有するか甚だ疑わしい。されど、父として心配せざるを得ぬ。もし正妻を迎え、真に相思相愛の関係が築けるならば、不義や浮気に走ることもあるまい。仮にその妻が冷淡で扱いにくい性質であったとしても、忍耐を以て添い遂げるのが道義というもの。良家の娘でなくとも、たとえ貧しき家柄であろうとも、心優しく、品性ある女性であれば、大切にし、生涯を共にすべきである。それこそが誠実さであり、真の男の徳であろう⁵²」。この言葉は、源氏自身の口を通して語られるものである。彼自身の行動としばしば矛盾する内容ではあるが、紫式部はあえて源氏の語りとしてこれを記すことで、当時の男性たちに向けた倫理的なメッセージを込めたと考えられる。しかしながら、その息子夕霧は、父の助言を守らなかった。幼少の頃より思いを寄せていた正妻・雲居の雁と結ばれ、子をもうけたにもかかわらず、彼もまた別の女性を娶るに至ったのである。紫式部は、このような展開を通じて、平安時代における男性の一夫多妻的傾向の根深さを指摘し、たとえ誠実で厳格と称される人物であっても、欲望からは完全には逃れられないという現実を描いている。事実、宮中において真面目一徹と評判であった夕霧も、晩年には亡き友人の未亡人である女二宮に恋慕の情を抱き、心を乱されるようになったのである⁵³。

紫式部は、当時の男性中心的な価値観を、夕霧の述懐を通じて鋭く描き出している。すなわち、彼の言葉として「長年、ただ一人の女性を誠実に愛し続けてきた我が身に、人々は嘲りの笑みを交わす。周囲の諸公のように、女を取り替えることをせず、真面目一途な振る舞いを貫いてきたことが、かえって恥とされるような世の中である。そなたにとっても、誠実な男に仕えることは誉れではなく、むしろ、幾人もの女と関係を持つ男の関心を一身に集めることこそが、女の誇りであるようだ⁵⁴」と述べさせている。

夕霧は、こうした世間の風潮に抗しきれず、ついに他の女性を妻として迎え入れる。しかしながら、その行動は、最愛の正妻・雲居の雁に深い傷を与えることとなり、彼女はついに夫のもとを離れ、子らを伴って実家へ戻る。彼女の決意は固く、夫の度重なる謝罪や説得にも耳を貸すことはなかった。

その夜、夕霧はひとり寂しく宮中の一隅に身を横たえ、「恋がかくも我が身を悩ませ、禍を招くものであるならば、いっそ恋など消え去ればよい⁵⁵」と自嘲の念に沈んだ。紫式部はこの描写を通じて、忠実なる愛を貫く困難さ、そして女性たちが受けた理不尽な犠牲を、鋭く、かつ哀切に浮かび上がらせているのである。

8.10 浮舟

浮舟をめぐる物語は、『源氏物語』の末尾において最も複雑に絡み合った人間関係を描くものであり、薫と匂宮という二人の皇子が、彼女をめぐる対立する姿が鮮やかに表されている。しかも、薫は実質的に浮舟の夫であり、匂宮は彼女の姉である中の君の夫であるという、倫理的にも葛藤を孕んだ構図が物語を一層重層的なものとしている。このような緊張関係の中、紫式部は浮舟に二度の「逃走」という選択を与えている。すなわち、第一の逃走は薫の用意した山荘からの脱出であり、第二は俗世間からの完全なる離脱、仏門に入り、すなわち出家という形をとった。この出家という結末は、単なる信仰への目覚めではなく、むしろ女性が男性の支配や愛憎から逃れる唯一の手段として、紫式部が意識的に選び取ったものであると解釈できる。このようにして、浮舟は恋愛の三角関係の犠牲者であるのみならず、同時にその枠組みを拒絶する能動的主体として描かれ、紫式部はこの物語を通

じて、女性の苦悩と内なる自立への希求を象徴的に表現しているのである。

9- 出家という現象

仏教は六世紀頃に朝鮮半島を経由して日本に伝来し、十世紀に至るまで主に貴族階級、すなわち日本における支配的寡頭勢力（オリガーキー）の宗教として受容されていた。このような背景のもとで、出家という行為は単なる宗教的選択にとどまらず、社会的・政治的文脈の中でも特別な意味を持っていたと考えられる⁵⁶。日本に伝来した仏教は、インドにおける起源の仏教とは異なり、多くの宗派に分かれ、それぞれの宗祖や高僧たちによって独自に発展していった。とはいえ、仏教の根本理念としては、「悟りの境地に到達すること」や「煩悩からの解脱」が重要視され、現世への執着を捨てて出家という形で世俗と距離を置くことが推奨された。特に十世紀には、浄土思想（浄土教）の影響が貴族社会にも広まりを見せた。源信の著した『往生要集』

（985年）はその代表的な文献であり、「現世」および「地獄」への嫌悪を出発点として、阿弥陀仏の光と慈悲による極楽浄土への往生を目指すことが説かれた。このような浄土思想は、『源氏物語』にも色濃く反映されており、現世を苦と煩悩に満ちた場として捉え、そこから離脱しようとする姿勢が物語中の多くの人物に見られる。ただし、平安貴族の間では、仏教は単なる信仰対象にとどまらず、現世利益を得るための手段としても用いられた。たとえば、真言宗や天台宗の密教儀礼では、災厄除け、安産祈願、延命、死者の鎮魂などが目的とされた。宮中における儀礼や祈祷も、国家安泰や一族の繁栄を願う現世的関心によって支えられていた⁵⁷。紫式部自身の『紫式部日記』にも、娘の安産のために高僧たちが呪法を用いる場面が描かれている。こうした現世利益と精神的救済の二重性は、『源氏物語』における仏教的描写の大きな特徴の一つである。たとえば、物語中に登場する朱雀院は、自らの罪業を償い、悟りを得ることを求めて、世を捨てて山中で出家生活に入る。一方、光源氏もまた、幾度となく出家を思い悩み、現世を離れようとするものの、愛情や未練によってその決断を躊躇する場面が描かれる。しかし、最終的には最愛の若紫の死をきっかけとして、彼もまた出家を決意し、世俗を離れる。出家は決して軽々しい決断ではなく、大きな覚悟を要する行為であることも、作中に明

確に示されている。たとえば、明石の御方が光源氏に対して語った次のような言葉に、その心情がよく表れている。「この道に入るからには、いささかの曇りもなく、悔いのない賢明な決断でなければなりません。どうか、拙速な判断ではなく、十分にお考えになってくださいませ」。このように、『源氏物語』における出家の描写は、単なる宗教的儀礼ではなく、平安貴族社会における仏教受容のあり方や、女性・男性の内面的苦悩、そして精神的な逃避や救済への希求を表す象徴的な行為であったと解釈できる。

しかし、若さと美しさの絶頂にある時期に出家という決断を下すことは、単なる世俗離れ以上の意味を持つ。それはすなわち、強い信仰心の表れであるか、あるいは世俗における苦難——出家という選択よりもさらに困難な状況——からの逃避である可能性が高い。『源氏物語』において描かれた女性たちの出家は、しばしば後者の側面を持つ。すなわち、彼女たちは必ずしも仏道への深い信仰心から出家したのではなく、男性からの抑圧や愛の苦悩、あるいは望まぬ関係から逃れる手段として出家の道を選んだのである。その意味で、出家は精神的自立を象徴する行為であり、同時に社会的束縛からの脱却でもあった。なお、出家に際しては一定の儀礼が存在し、外見上の変化も伴う。たとえば、髪を剃り、僧衣と呼ばれる特別な衣服を身にまとうことにより、世俗からの離脱と仏道への帰依を明示するのである。

平安時代において、女性の長い黒髪は美の象徴とされ、女性の魅力を構成する重要な要素であった。物語の随所においても、女性の髪の美しさが男性の心を奪う様子が描かれており⁵⁸、長髪を断つという行為は常識を逸した決断、あるいは狂気の沙汰とみなされかねなかった⁵⁹。それにもかかわらず、『源氏物語』に登場する女性たちは、みずからの美を捨て、髪を剃り、僧衣を身にまとい、出家という道を選んでいる。これは、単なる宗教的動機からではなく、男性社会の抑圧から逃れるための手段、すなわち一種の抵抗と自己防衛としての選択であったことを示唆している。このような解釈を裏付けるように、紫式部は登場人物たちの台詞や心理描写において、出家の背景にある苦悩や絶望、そして男性との関係の限界を繊細に描き出している。以下に挙げる引用からも明らかなように、出家は彼女たちにとって「信仰」以上に「逃避」であり、同時に「解放」でもあった。

すでに言及したように、光源氏の従兄弟であり、最初の正妻葵の上の兄でもある右大臣の言葉の中には、女性が夫の裏切りを知った際にその関係を断ち、出家という道を選ぶことがあるという認識が示されている。「すなわち、汝が不貞を働いたと知った女が汝を捨てて、あるいは山中の庵や寺院に籠もり、髪を剃りて尼となることもあろう。されど、そのような女とともに生きることは、誠に厄介で困難であろう⁶⁰」。また、光源氏が尼となった空蟬に向けた次の言葉―「そなたが出家してしまった今、もはや共に暮らすことはできぬ⁶¹」―からも、女性が仏門に入ることによって男性との関係を断ち切り、その手の届かない存在となることが示唆されている。さらに、「このところ、涙と悲しみに耐えることができなかった。あなたが私を捨て、仏の道へ入って私の元を離れようとしているのを感じたからだ⁶²」という言葉にも、出家が男性からの離脱を意味していることが明確に表れている。すなわち、女性が男性の支配から逃れる手段として、仏門への帰依が描かれているのである。

また、光源氏が語る次の言葉にも、正妻・女三の宮が彼のもとを離れ出家するという「逃避」の構図が明確に示されており、加えてその行為が一種の「報い」であることも読み取れる。「ああ、あの忌まわしき霊、六条御息所の御霊が、今また女三の宮に取り憑いてしまったのか。かくして彼女をも尼に変えてしまい、我が元から遠ざけ、奪い去るとは。呪われよ、呪われよ⁶³」。この言葉は、源氏が最も愛した女性にして妻である彼女を、霊的・社会的双方の力によって失うという事態に対する嘆きであるが、その背景には紫式部の意図―すなわち、女性の出家を「男性からの逃避」であると同時に、「男性に対する懲罰」として描こうとする視点が透けて見える。また、物語の中には、男性からの逃避として出家という道を選ぶ女性たちの例が他にも見られる。たとえば、藤壺中宮は、父である帝の崩御後、光源氏の執拗な求愛と強引な接近から逃れるため、彼に何も告げずに髪を剃り、尼となる。これによって、彼女は源氏の手が届かぬ存在となり、その関係に終止符を打つこととなった。同様の例として、朧月夜も挙げられる。彼女は、光源氏との過去の不祥事の後、帝・朱雀院の後となったが、その後、朱雀院が出家して世を捨てたことで取り残される。加えて、源氏が再び彼女に接近し、かつての関係を取り戻そうとするなかで、

自身がその間で揺れ動く存在であることに苦悩する。最終的に彼女は、自らの意志で髪を剃り、出家する道を選ぶ。これは、源氏の手の中で弄ばれる存在であることから逃れるための選択であり、女性が自己決定の手段として仏道を選ぶ姿を如実に物語っている。また、女三の宮も、自身が柏木との間に不義の子をもうけたという過酷な現実と、それに対する源氏の冷ややかな態度から逃れるかのように、出家という道を選んだ。彼女にとって、仏門への道は信仰というよりも、状況からの避難手段であったと考えられる。同様に、女三の宮の妹である落葉宮もまた、夕霧からの度重なる求婚と執拗な接近に悩み、出家することでその求めから逃れようとした。彼女の行動は、女性が男性の支配や圧力から距離を取るために仏道に入るという『源氏物語』に繰り返し描かれるパターンの一例である。

さらに、若紫は、源氏の最も寵愛した正妻でありながら、彼の数多の浮気や情事に生涯苦しみ続けた。彼女は常にその苦しみを内に秘め、決して不平や不満を表に出すことはなかったが、次第にその人生に限界を感じるようになったのであろう。紫の上は、現世の煩惱から離れ、仏門に入りたいと源氏に幾度も願い出たが、彼はその度にそれを拒み、彼女の願いを聞き入れようとはしなかった。むしろ、彼女に対し「そのような願いは二度と言わぬように⁶⁴」と命じ、自身の傍にとどまることを強く望んでいた。そして、浮舟の物語においては、紫式部の視点がより明確に表れている。浮舟は、薫と匂宮という二人の皇子から迫られる中で心を病み、自ら命を絶とうとした。しかし一命を取り留めた後も、彼らからの逃避を図るかのように、軍人の求婚までも断り、遂には出家の道を選ぶ。「尼君のすすめにもかかわらず、姫君は新たな恋の始まりを予感し、それがまた苦しみと悩みをもたらすことを恐れた。過去の経験を繰り返すことを望まず、『これ以上の煩わしさを避けるためにも、仏道に入って心静かに過ごしたい』と述べ、結婚を断り、代わりに尼君に対して、自身の出家を手助けしてほしいと願ったのである⁶⁵。」そして、姫君はついに薫のもとから完全に逃れた。

「姫君は、僧・源信から髪を再び伸ばし、隠遁の生活をやめて薫と結婚するようにと説得されたが、それを受け入れる心の準備はなかった。つい数日前に、彼女はようやく自分を愛した二人の男性の間で揺れ動いた記憶から解放されたばかりだった。そう、あの匂宮のことも——かつては心を焦がすほどに愛したその人にさえ、今では何の感情も抱

いていなかったのである⁶⁶」。物語の最後に置かれた文——「何も思い出せません……。あの方は勘違いなさったのかもしれません。私はきっと、そのお方がお探しの女性ではないのでしょうか⁶⁷」——は、読者にとっても衝撃的な結末であり、紫式部が平安時代のすべての男性に宛てた痛烈なメッセージであったと解釈できる。浮舟による「記憶喪失」のふりと、薫との過去を完全に否定する姿勢は、女性が男性の支配や感情の玩弄から完全に解放される瞬間を象徴しており、物語における最終的な女性の「抵抗」として極めて象徴的である。

10- 結論

シモーヌ・ド・ボーヴォワールは著書『第二の性』において、「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」と述べ、女性とは生物学的な性差ではなく、社会的・文化的構築物であるとする視点を提示した。この視点から平安時代を見ると、女性たちは父や夫、天皇といった男性の権威の下に従属し、「女性」としての役割を社会的に押し付けられていたことが明らかになる。そのような時代背景の中で、紫式部は制度的にフェミニズム運動が存在しなかったにもかかわらず、『源氏物語』という前例のない長編小説を通して、女性の苦悩、葛藤、そして静かな抵抗の意志を文学という形式で表現した。その意味で彼女の創作行為自体が、父権制社会に対する最初期のフェミニズム的実践の一つと捉えることができる。紫式部は、光源氏という官能的かつ享乐的な男性主人公を据えることで、表面上は恋愛物語として展開させつつも、彼の行為に対して繰り返し批判的な視線を向けている。登場する女性たちは、彼によって傷つけられ、苦しみなながらも、自ら出家という選択を通じて男性支配から距離を取り、自立の道を模索する存在として描かれている。たとえば、女三の宮や浮舟は、愛の葛藤や現世の苦悩から仏道に入ることで自己決定権を示しており、これは Haruo Shirane の『The Bridge of Dreams』でも指摘されているように、当時の宗教思想と女性の内面的成長が結びついた結果である。

また、藤壺や六条御息所のように、欲望・名誉・制度との間で苦悩する女性像は、当時の女性の心理的複雑さとともに、社会制度そのものへの問いかけとして読むことができる。紫式部は、彼女たちの内面世界を深く掘り下げ、感情の繊細な動きや沈黙の中にこそ女性の強さと

尊厳があることを描いた。さらに、田辺聖子や島田燐子といった研究者たちも、紫式部が女性の視点から物語構造に批判的意識を織り込んでいることを高く評価している。紫式部は作中の男性登場人物の誰一人として、女性を苦しめた行為に対して無罪放免とせず、病・死・喪失といった形で報いを与えている。これは現実において反撃できなかった女性たちの怒りと無念を、物語という形で昇華した証でもある。

このように『源氏物語』は、単なる宮廷恋愛物語ではなく、抑圧された女性たちの声を代弁し、紫式部自身の内なる反抗と批判精神を体現した文学的表現である。それは時代の制約の中で語られた「抑えられた叫び」であり、今日においても響き続ける普遍的な訴えである。そのため、『源氏物語』は世界最古級の長編小説としてだけでなく、人類史における最初期のフェミニズム文学の一つとして再評価されるべき作品なのである。

¹ *Bebel, August, and Daniel De Leon. Women under Socialism. New York: New York Labor News, 1904. P.24*

² 同上2頁。

³ 大内兵衛・大内節子訳、J.S.ミル著『女性の解放』岩波書店、1998年、39頁。

⁴ なお、ミルはこの書籍を1869年に執筆し、当時のイギリス社会における女性の地位を批判した。この著書の中で、ミルは男性と女性の権利、特に政治的権利の平等を強く主張し、男性と同様に女性にも参政権を与えるべきだと訴えた。

⁵ 同上39頁。

⁶ サファール・ヌール「日本におけるフェミニズムの展開：比較研究」、博士論文（未出版）、カイロ大学、エジプト、2014年、18頁。

⁷ *Buckley, Sandra. Broken Silence: Voices of Japanese Feminism. Berkeley: U of California, 1997.P.257.*

⁸ 同上20頁。

⁹ *Komashaku Kimi and Tomiko Yoda U.S.-Japan Women's Journal. English Supplement No. 5 (1993), pp. 28-51 Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/42772059>*

¹⁰ もろさわ葉子『おんなの歴史（上）』未来社、1977年、96～100頁。

¹¹ 大野晋『古典を読む源氏物語』岩波書店、1996年、9～19頁。

¹² 同上15頁。

¹³ 西沢正史『源氏物語を知る事典』東京堂出版、2000年、167頁。

¹⁴ 同上170頁。

¹⁵ 同上170～173頁。

¹⁶ 阿部秋生『源氏物語評釈』清水書院、1974年、4～10頁。

¹⁷ 西沢正史『源氏物語を知る事典』東京堂出版、2000年、189～190頁。

¹⁸ 瀬戸内寂聴著、アフマド・ファトヒ訳『源氏物語』カイロ：ダール・ミリット、2004年、31頁。

¹⁹ 同上34頁。

²⁰ この物語では、女性が人目に触れないようにするという考えが繰り返し描かれている。それは単なる習慣ではなく、むしろ女性の美德の一つとされていた。例えば、大僧都が尼である紫の上の祖母に対して、好奇の目を警戒するように忠告する場面がある。その場面では、大僧都が彼女に次のように注意した。「この場所は人目につきやすく、垣根越しに覗き見られるかもしれません。何故今日に限って、家の端に座っておられるのですか？ つい先ほど、源氏があの山の上の庵へ向かわれたと聞きました。供の者たちと共に、物の怪を祓ってもらうためだそうです。どうかお氣をつけください。」この言葉を聞いた尼は驚き、慌てて席を立つと、竹の簾を下ろしながら次のように言った。

「ああ、何という恥でしょう。もしかすると、どこかの知らぬ者に見られてしまったかもしれません。」79頁。

また、源氏の息子である夕霧が、父の妻の一人の部屋の簾が開いてしまっているのを目にし、動揺する場面もある。

「夕霧は、御簾が開いたままで侍女たちも気づいていないことに気がかりを覚え、すぐにでも駆け寄って簾を下ろし、女性たちの姿を隠したいと思った。」465 頁。

さらに、「隠すこと」と「貞淑さ」が結びついていることを示す場面も見られる。例えば、柏木とその妹である女三宮の対比である。「たとえ兄妹であろうとも、慎ましやかで貞淑な女五の宮は、兄である柏木の君が自室を訪れても、簾の奥に立ったままで決して顔を見せようとしなかった。一方で、幼い女三宮は、柏木の君の目の前に姿を現していた。彼は心の奥で二人の違いを思い、妹の慎み深さに感心した。」473 頁。このように、『源氏物語』の中では、女性の存在が社会の中でどのように位置づけられていたかが明確に示されている。当時の倫理観において、女性はできる限り人目に触れないことが望ましいとされ、たとえ兄妹や義理の息子の前であっても、姿を隠すことが美德とされた。このような価値観が、当時の女性の役割を限定し、公の場から排除する要因となっていたことがうかがえる。

²¹ 同上 34 頁。

²² 同上 34～36 頁。

²³ 同上 40～41 頁。

²⁴ 同上 36 頁。

²⁵ 源氏の君は、目の前の女性と今共にいる女性を比べて考えた。姫宮・宮壺は聡明で機転が利き、周囲への気配りを欠かさない。そのため、一緒にいる者は彼女の鋭さに気を遣い、緊張してしまい、心からくつろぐことができないのだった。彼は彼女の優れた資質を認めながらも、物足りなさを感じずにはいられなかった。それに対し、夕顔の家の女性は、子供のように純真で、宮壺ほど鋭敏ではなかった。しかし、その無邪気さこそ源氏を自然体でいさせ、心を落ち着かせるのだった。彼は心の中で、宮壺にもこのような側面があればよいのに、と願わずにはいられなかった。

²⁶ 同上 70 頁。

²⁷ もろさわ葉子『おんなの歴史(上)』未来社、1977 年、P.105。

²⁸ 瀬戸内寂聴著、アフマド・ファトヒ訳『源氏物語』カイロ:ダール・ミリット、2004 年、70 頁。

²⁹ 同上 114 頁。

³⁰ 同上 384 頁。

³¹ もろさわ葉子『おんなの歴史(上)』未来社、1977 年、P.105。

³² 本稿における該当場面の件数は、筆者自身による個別の場面の検討および計数に基づいて特定されたものである。

³³ 同上 90 頁。

³⁴ 同上 92 頁。

³⁵ 同上 111 頁。

³⁶ 同上 112 頁。

³⁷ 同上 150 頁。

³⁸ 同上 46 頁。

³⁹ 同上 48 頁。

⁴⁰ 瀬戸内寂聴著、アフマド・ファトヒ訳『源氏物語』カイロ:ダール・ミリット、2004 年、65 頁。

⁴¹ 同上 67 頁。

⁴²紫式部は主人公へのさらなる復讐として、彼に病を与え、床に臥せらせることによって、その苦悩を強調したのである。これは、前述の姫君たちに対して彼が犯した数々の過ちに対する報いとして描かれている。

⁴³かくのごとく、紫の上は、まことに理想的なる女にして妻なり。音楽のたしなみにおいては高雅の極みに至り、また孫たちを慈しみ育むことにも、少しの落度もなき人なり。493 頁。

⁴⁴ 同上 500 頁。

⁴⁵ 同上 86 頁。

⁴⁶ 同上 544 頁。

⁴⁷ 同上 101 頁。

⁴⁸かくて秋風の立ちそむる頃、源氏の君、女ごとにまつはること日々に重なりゆきて、さまざまの憂きことまでも生じ給ふによりて、御心やすからず、夜々の御寝も浅くなり給へり。その故に、正室なる葵の上との御仲、いよいよ遠ざかり給ひ、君もまた、御足の向かひまゐらすること稀になりぬ。日を経るままに、御心の隔たり深くなりゆくを覚え給ひて、なるべくは対面を避けまほしき御心ばへにぞありける。されば、葵の上の御心中に君を忌み憎み給ふさま、いとまさりて感ぜられけり 57 頁。

⁴⁹されば、御方「致仕の君」なる御心の内には、日を経るままに、君の御情のうとまりゆくさま、いとあはれに思し嘆かれけり。常に通ひ給ふこともまれにて、御門の内いと静かに、夜の更くるも心細げにて、さるべき人々の御あたりに候ふも、かの御仲のほどを思ひ知るに、心苦しく恥づかしきこと限りなし 132 頁。

⁵⁰も思し召さず、御顔をも見んとせず、いと寂しく物思ひに沈みて、長き夜をひとり臥し給ひける。
この世にては、いまは何ごとも望むことなく、ただ仏の道に入りて、心を静めばやとぞ思し召しつづけ給ふ。かの御妻の、耐へがたき苦しみに堪へて、終に病に伏し給ひしこと、思ひ出で給ふにつけても、御胸のうち痛みて、いとど悔ゆること限りなし。幾度となく、かの御方の御情を裏切りて、浮かれ女どもと交はり給ひしを、何ゆゑかと、ただただ不思議に思し召すばかりなりき。容貌もたをやかに、心も深く、誠の愛に満ちておはしし御方を、なにゆゑにさまで苦しめ給ひしぞと、悔やみても悔やみきれぬ思ひに沈み給ひけり。619、620 頁。

⁵¹ 同上 363 頁。

⁵² 同上 409 頁。

⁵³ 同上 592 頁。

⁵⁴ 同上 598,599 頁。

⁵⁵ 同上 609 頁。

⁵⁶ Hori, Ichirō. *Japanese Religion. A Survey by the Agency for Cultural Affairs*. Tokyo: Kodansha International, 1972.P.50.

⁵⁷ Shirane, Haruo. *The Bridge of Dreams: A Poetics of "The Tale of Genji"*. Stanford University Press, 1998.P.170-171.

⁵⁸彼はただ一つの慰めを自らに与えようとした——それは彼女の外見における唯一の美点、すなわち足元まで届くほどの長くて黒い髪であった。その髪的美しさは、見る者すべてが称賛せずにはいられないものであった 105 頁。

若紫の髪は、艶やかな黒で、非常に長く豊かであった。その長さで豊かさゆえに背中を覆い、衣の裾にまで達していた。彼女の身体は美しく均整が取れており、このような美貌と風姿によって、周囲に圧倒的な魅力を放ち、男たちの間に緊張感すら漂わせていた 491 頁。

しかし、その長く広がる黒髪によって、彼女は人の心を奪うほどの魅力を放ち、見る者すべてを惹きつける妖艶な美しさを備えていた 535 頁。

⁵⁹源氏は、彼女の髪が剃られ、顔色が青ざめ、衣も粗末な姿を想像するたびに、あの美しい長い黒髪と華やかな顔立ちを失ったことに対する哀れみの念を禁じ得なかった 561 頁。

しかし、彼女が膝をつき、頭を垂れて、肩までの長さに整えられた美しい黒髪を剃るために備えている姿を目の当たりにしたとき、二人はためらいと動揺を覚え、手にした鋏を止めた。彼女の髪を切ることが、まるで大きな罪を犯すかのように感じられ、この魅惑的な美しさが、この寂しい人里離れた場所において消え去り、葬られてしまうことがあまりにも惜しまれた 653 頁。

かつては美しく整った姿であったのに、今や髪を剃り、尼となったことを、どうか後悔することのなきように、くれぐれも心してほしい 654 頁。

⁶⁰ 同上 36 頁。

⁶¹ 同上 607 頁。

⁶² 同上 322 頁。

⁶³ 同上 566 頁。

⁶⁴源氏は、紫の上が出家を望むたびに、その願いを退けるだけでなく、再びそのようなことを口にしないよう強く求めた。彼の心の内では、彼女が自らのもとを離れて山奥の寂しい庵に籠もるくらいなら、いっそ彼女がこの世を去る方がまだましであると思っていたのである 503 頁。

⁶⁵ 同上 651 頁。

⁶⁶ 同上 661 頁。

⁶⁷ 同上 661 頁。

参考文献

- 瀬戸内寂聴(著)、アフマド・ファトヒ(訳)『源氏物語』カイロ：ダール・ミリット、2004年。
- 大内兵衛・大内節子訳、J. S. ミル著『女性の解放』岩波書店、1998年。
- 大野晋『古典を読む源氏物語』岩波書店、1996年。
- もろさわ葉子『おんなの歴史(上)』未来社、1977年。
- 西沢正史『源氏物語を知る事典』東京堂出版、2000年。
- 服籐早苗『平安朝女性のライフサイクル』吉川弘文館、2009年。
- 藤井貞和などの編『日本文学史(第一巻)』岩波書店、1995年。
- 島田燐子『日本のフェミニズム』北樹出版、1997年。
- 阿部秋生『源氏物語評釈』清水書院、1974年。
- サファール・ヌール「日本におけるフェミニズムの展開：比較研究」、博士論文(未出版)、カイロ大学、エジプト、2014年。
- Shirane, Haruo. *The Bridge of Dreams: A Poetics of "The Tale of Genji"*. Stanford University Press, 1998.
- Buckley, Sandra. *Broken Silence: Voices of Japanese Feminism*. Berkeley: U of California, 1997.
- Komashaku Kimi and Tomiko Yoda *U.S.-Japan Women's Journal. English Supplement* No. 5 (1993), pp. 28-51 Retrieved from <http://www.jstor.org/stable/42772059>
- Hori, Ichirō. *Japanese Religion. A Survey by the Agency for Cultural Affairs*. Tokyo: Kodansha International, 1972.
- Anesaki, Masaharu. *History of Japanese Religion, with Special Reference to the Social and Moral Life of the Nation*. Rutland, VT: C.E. Tuttle, 1963.
- Aston, W.G. *A history of Japanese Literature*. Chales E. Tuttle Company. 1977.
- Bebel, August, and Daniel De Leon. *Women under Socialism*. New York: New York Labor News, 1904. *Many Books*. 10 Dec. 2009. Web. 4 Apr. 2016. <www.manybooks.net>.